キリスト教保育における「行事」の取り扱いについて

― 子ども達に伝える日本の様々な行事について ―

About the handling of “events” in Christian childcare

-About various events in Japan to tell children-

松　尾　裕　美

Hiromi Matsuo

「福岡女学院大学紀要　人間関係学部」第 23 号抜刷

2022 年 3 月

キリスト教保育における「行事」の取り扱いについて
― 子ども達に伝える日本の様々な行事について ―

About the handling of “events” in Christian childcare
-About various events in Japan to tell children-

松　尾　裕　美
Hiromi Matsuo

Ⅰ．はじめに

ここ 30 年の間にキリスト教保育を行っている教育の現場は大きく変化してきている。2015 年に認定こども園が制度化され、幼稚園であったところが３歳未満児を預かることができる認定こども園へと変更されているところが多く見かけられる。法人自体も学校法人化が進み、母体である教会と幼稚園、保育園の関係も 30 年ほど前は教会付属の園が多くあったが、現在宗教法人の幼稚園は少なくなってきている。今日では、学校法人化、社会福祉法人化に流れが変わり、日曜学校での子どもの人数も少なくなってきている。また、幼稚園と保育園では子どもの人数にも二極化が進み、保育園では入園希望者が多く、幼稚園では少なくなり、ここ数年でもキリスト教保育を行っている幼稚園が閉園に追い込まれることがあるのは事実である。それらの原因は様々であるが、出生率の低下、母親の自己認識の変化や社会進出等で育児に対する考え方の変化に見ることができる。また、通園バスを始め、給食、預かり保育の充実も母親サイドからの要望が強くなってきていることも挙げられる。

本稿ではキリスト教保育の重要性を考え、保育の中で「日本の伝統行事、文化」をどのようにカリキュラムに取り入れられているか検証することを目的とする。幼児教育の場において、日本古来の伝統がどのような形となって子ども達へ継承されていくのかも同時に検証をしていく。

Ⅱ．キリスト教保育の歴史

キリスト教保育はどのような歴史を辿り、今日の保育へとつながっていったのかを調べていくと、キリスト教信仰に生かされた人々が、子どもの保育、教育に積極的に関わったオベルラン（1740 ～ 1826）、ペスタロッチ（1746 ～ 1827）、フレーベル（1782 ～ 1852）等をあげることができる。日本での明治以降の歩みを見ると、欧米からの女性宣教師たちの多くがその働きを担っており、宣教師の働きに触発されたキリスト教信者らが幼児教育の取り組みを行ったと考えられる。最初の幼稚園として 1880 年に開設された現在の横浜英和女学院がある。現存する幼稚園としては、現在の北陸学院第一幼稚園が最も古いと思われる。その後、各地に幼稚園が設立されていったと考えられる。キリスト教のもう１つの保育の流れは、福祉の観点から保育の場を提供し、生活困窮区や子どもを保護することを目的として作られた無料の幼稚園などがある。日本におけるキリスト教保育は、教育面を強調するものと子どもを保護することを強調する２本の柱となって今日へと繋がっていると考えられる。のちに 1889 年にキリスト教信仰に基づく保育者養成機関として頌栄保姆伝習所（現在の頌栄短期大学）が開設された。乳幼児教育の現場で、キリスト教保育連盟が発行している「キリスト教保育」を保育テキストとして使用している園も多い。そこで、今年度の「キリスト教保育」の年主題を調べてみた。2021 年の主題は表１．表２．の通りである。

表1．2021年度キリスト教保育主題　3歳児

	月	主題	3歳児　月主題　月のねがい
2021年度　年主題　共に喜んで　～すべての歩みの中～	4月	一人ひとりの名を読んで	・一人ひとりが、保育者や園の環境を通して神様から愛されていることを感じ、安心して過ごす。
			・存在そのものが受け止められる中で、好きな遊びや場所が見つかる。
			・絵本やわらべ歌を通して、保育者との触れ合いを喜ぶ。
			（保）子どもと保育者、そして互いの名前を心を込めて呼び、信頼関係を築いていく。
	5月	動き出す	・保育者や友達と一緒に讃美歌をうたうことやお祈りをすることを喜ぶ。
			・身の回りのことを、保育者に助けられながら安心して行う。
			（保）一人ひとりのあり方で、好きなことを見つけて動き始める姿を見守る・
	6月	やってみたい	・天気、草花、生き物などの話を通して、神様を感じる。
			・泥、砂、水に触れることを楽しみ、様々な感触を体験する。
			（保）子どもの自分で使用とする姿を大切にし、ゆっくりと待ち、支える。
	7月	心ゆくまで	・讃美歌をうたったりお祈りすることが生活のひとこまとなる。
			・水遊び、フィンガーペインティングなど心が解放される遊びの楽しさを味わう。
			・自分の思いを保育者や身近な友達に伝えようとし、態度や言葉で表す。
	8月	祈り合う	・普段とは違う経験もある中、いつでもどこでも神さまのお守りがあることを感じる。
			・木陰のここと良さや水遊びの後に汗が引いて涼しくなる感覚を味わう。
			（保）ゆったりとしたかかわりの中で、子どもと一緒に夏の空、虫、野菜、果物など季節を感じる機会を持つ。
	9月	心かよわせて	・遊びの中や礼拝の中で、神様が創られた命のおもしろさや素晴らしさに心をとめる。
			・好きな遊びを気の合う友達と一緒にすることが楽しくなり、交わり（関わり）を喜ぶ。
			（保）友達とのかかわりが深まりやり取りをする中で、喜び合ったり、ぶつかったりと思いを伝え合う経験ができるように支える。
	10月	はずませて	・聖書の話を聴く機会が増え、神さまの愛（みこころ）を共に感じる。
			・季節の移り変わりを感じる中で、身体を動かす心地よさを感じる。
			・リズムや音楽に合わせて、歌ったり、身体を動かすことに心をはずませる。
	11月	深める	・秋から冬への自然を五感を通して感じながら、神様からのたくさんの恵みに感謝する。
			・体験したことを、ごっこ遊びやものつくりなどで再現して楽しむ。
			・葛藤を感じる場面で、保育者や友達に思いを表し、共感してもらったり、自分で折り合いをつける経験をする。
	12月	喜びいっぱい	・聖書に描かれているイエス様のお誕生の話を聴き、クリスマスをうれしく待ちながら、共に喜び祝う。
			・友達と一緒に讃美したり踊ったりすることに喜びを感じる。
			・寒さの中でも、戸外での遊びを楽しむ。
	1月	じっくりと	・友達や保育者と礼拝を守り、聖書の話により親しむ。
			・お正月の遊びに触れたり、新しいことに興味を広げ繰り返し取り組む。
			（保）息の白さや、冷たい風、霜柱など保育者自身の気づきを大切にしながら、子どもとともに冬の自然を感じて遊ぶ。
	2月	わかちあって	・家族や友達のために自分から祈ろうとする。
			・気の合う友達と誘い合って遊び、気持ちが通じることの喜びを感じる。
			・わらべ歌や鬼ごっこなど、ルールのある遊びを楽しむ。
	3月	信じる	・神さまに守られて大きくなったことを喜び、感謝する。
			・心満たされる日々を経験し、4月からの新しい生活を待ち望む。
			・友達と思いをうたえ合うことを喜び、互いの思いやその子らしさを受け止め合って過ごす。
			（保）一人ひとりの成長の姿を保護者や保育者間で共有し、神様に感謝し、互いに希望を持つ。

表2．2021 年キリスト教保育主題　4・5 歳児

	月	主題	4・5歳児　月主題　月のねがい
2021年度　年主題　共に喜んで　～すべての歩みの中～	4月	一人ひとりの名を読んで	・日々の生活の中や礼拝の中で、一人ひとりを知り愛してくださる神様・イエス様を感じて歩む
			・置かれた環境の中で、安心して過ごし遊び始めるとともに、進級したことを喜び、張り切って過ごす。
			・春から初夏の自然の中に身を置き、楽しむ。
			（保）子どもと保育者、そして互いの名前を心を込めて呼び、信頼関係を築いていく。
	5月	動き出す	・与えられている時、物、事、人、自然などの恵みを喜び、神様に感謝する。
			・感じて考えて、自分のやり方で動きだし、様々なこと（遊び）に教務を持つ。・周りの人に支えられながらも、自分の思いを持って主体的に生活する。
			（保）子どもが興味関心を抱き、楽しく取り組めるような環境をつくる。
	6月	やってみたい	・保育者と友達と礼拝を守りながら日々を歩む。・遊びながら、手や身体を使い、様々な方法や道具使いを習得していく。
			・教務を持ったことに、「もっとやりたい、もっと知りたい」と思い、繰り返し楽しむ。
			・思い通りの行かないことや友達とのぶつかり合いを通して、やり直したり仲直りをする経験をする。
	7月	心ゆくまで	・祈りの時に、一人ひとりが共にいてくださるイエス様を感じ合って「アーメン」と声を合わせる。
			・遊びの中で、表現すること・探求すること・交わることを心ゆくまで楽しむ。・心身を開放して遊び過ごす中、夏を感じ楽しむ。
			（保）家庭と連携して、健康な生活リズム・生活習慣を大切に支える。
	8月	祈り合う	・神さま・イエス様が平和を下さり、私たちに平和を作り出すことを望まれていることを知り、祈り合う。
			・暑さの中、夏ならではの遊びを喜び、ゆったりと遊ぶ。また、心身の休息の時を持つ。・季節の移ろいの中、自然と触れ合い、その美しさや面白さや不思議さに心を動かしながら遊ぶ。
			・穏やかに、落ち着いた丁寧な生活をする。
	9月	心かよわせて	・聖書の中の神様の物語（言葉）を共に聴く
			・友達と時と場所を共有して遊び、楽しさにも難しさにも心を通わせて過ごす。・季節の移ろいの中、自然と触れ合い、その美しさや面白さや不思議さに心を動かしながら遊ぶ。
			（保）一人ひとりの遊びや友達との関係をよく見て、子どもの気持ちを理解しながら支える。
	10月	はずませて	・神さまが創られた世界、自然を五感で感じ、恵みへの感謝を讃美や祈りで表す。
			・一人でも、友達とでも、心と身体を弾ませ夢中になって取り組み、深めたり，創り出すことを楽しむ。
			・躍動の時と静まるときの両方を、豊かに心地よく過ごす。・絵本や物語をゆっくりと楽しむ。
	11月	深める	・成長させてくださる神様、実りの時を下さる神さまに感謝する。・友達と心を合わせて、相談したり、アイデアを出し合ったり、思いの違いを調整しながら喜んで遊ぶ。
			・自分で感じ想像し工夫し，創ったり表現したりすることを深める。
			（保）保育者間で聖書を読み、讃美歌を歌い、祈り合って、アドベントの備えをする。
	12月	喜びいっぱい	・神さまがこの世に、イエス様を与えてくださったクリスマスの意味を知り、感謝と喜びを持って受け止め、礼拝する。また、喜びを伝え合い、岩井合う、分かち合いの経験をする。
			・一人ひとりの与えられている恵み（賜物）を用いて友達と協力したり、役割を分担しながら遊び、生活していく中にある喜びを感じる。
			・困っている、悲しんでいる人に心を向け、祈りながら自分たちにできることを考えていく。
	1月	じっくりと	・クリスマスから繋がる平安と喜びの中、イエス様の御言葉を心にとめて歩む。・好きな遊びにもそれまで経験していなかった遊びにも楽しさを見いだし、繰り返しじっくりと取り組んで得る満足感を明日へと続けていく。
			・友達と相談しながら、時間をかけて思いを実現していく過程を楽しむ。
			・冬から春に向かう自然を感じながら、戸外で心身を動かし、友達と交わって過ごす。
	2月	わかちあって	・一人ひとりが神様から違った良いものを頂いていることを認め合って過ごす。
			・嬉しいことや、休んでいる友達のことなど、自分の言葉で祈る。・遊びの中で、ともに喜ぶ経験を重ね、共に明日を楽しみにする。
			（保）保護者や同僚と子どもの歩みを振り返り、成長を喜び、課題を心にとめる。
	3月	信じる	・どんなときにもともにいてお守りくださるイエス様が、これからも導いてくださることえお信じ、希望を持つ。
			・育まれた信頼関係を土台に、安心して４月からの生活に歩み出していく。
			・春の訪れを感じながら、心いっぱい遊びこみ、交わる。
			（保）成長させて下さる神さまに感謝する。

2021年は、年主題として、「共に喜んで～すべての歩みの中～で」ある。各年齢、月のねがいとして聖書に忠実に計画されていることが分かる。

年主題聖句として「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が喜ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」コリントの信徒への手紙Ⅰ　12章26節を挙げている。パウロは“教会とは、イエス・キリストの体であり、そして一人ひとりが、その体をなすために、神によって集められた部分なのです。それ故に、それぞれの働きは違うけれども、互いが否定し合うのではなく、お互いを必要として、互いに心と力を合わせて、イエス・キリストの体として、神の愛をあらわしていこうではありませんか”[3]と呼びかけられたと述べています。

後宮 敬爾によると、「共に喜ぶとは、人間は弱さの中で傷つき、失敗し、落胆し、苦しんでいる。しかし、振り返ってみると、その弱さや苦しみの経験を通して、強かった時には気づかなかった子どもや保育者のもっと素晴らしい面を知ることができたのではないか」[4]と「聖書に聞く」のなかで、共に喜ぶ意味を説いている。

Ⅲ．幼稚園での行事について

宗教教育のない幼稚園の年間の大きな行事を挙げてみると、

４月入園式（進級式）、歓迎遠足、
５月端午の節句、母の日、
６月父の日、虫歯予防デー、
７月七夕、お泊り保育、
８月夏祭り、
９月敬老の日、お月見、
10月運動会、芋ほり遠足、
11月七五三お祝い、ハロウィン、
12月お遊戯会（クリスマス会）
１月お正月、餅つき、
２月豆まき、
３月ひなまつり、お別れ遠足、卒園式（終園式）

幼稚園における様々な行事を、キリスト教保育の観点から見ていくと、

４月入園式、始園式、誕生会
５月母の日礼拝、
６月父の日礼拝、ペンテコステ、花の日
７月七夕、お泊り保育、
８月夏祭り、
９月敬老の日礼拝
10月運動会、バザー、芋ほり遠足
11月収穫感謝祭、幼児祝福式、
12月アドベント、クリスマス礼拝、
１月お正月
２月節分、
３月イースター礼拝、卒園式

キリスト教保育が目指すものは、子どもが人として生きるための育ちに深くかかわり、神と人との関係を、大人と子どもとの関係において具体化しようとしながら保育者は、子どもが神の愛に気づき、喜びと感謝、信頼を持って日々歩みを積み重ねていくものと思われる。子どもが、自分という人間を大切に思い、大切な一人として受け入れられたり、喜んだり、感謝の気持ちを持って過ごすことができるようになるように援助を行いながら保育へと繋げていく。また、イエス様を身近に感じ、見えない神様の恵みに感謝しながら、神様といつも一緒に過ごす日常を大切に思いながら保育を行っていくことであると考える。その中で、お互いの違いを認め合いながら、回りの自然など神による恵みを受け取り感謝の気持ちを持ちながら過ごしていくことを大切に思いながら、計画されているものと思われる。そのことを考えながら、キリスト教保育の中で、行われている行事に目を留めてみることにする。まず何を行うにも祈りを持って始まり、祈りを持って終わるキリスト教保育には毎日の礼拝がある。讃美歌を歌い聖書の御言葉を暗唱聖句として唱えたり、神様のお話を牧師、保育者から聖話として、聖書に触れる時間がある。その中で私が大切にしてきたことがある。それは「祈る」ことである。友のために「祈る」のである。

Ⅳ．キリスト教の行事について

「礼拝」は朝のつどいに行われることが多く、３歳児の入園して間もない子ども達との「祈りの時間」は決して長くない。今日幼稚園に登園できたことの感

謝、お休みしているお友達のことを祈り、病気が早く治りますようにと言葉に出して祈る。礼拝の場は、教会や礼拝堂とは限らず、保育室、園庭の木陰、遠足で出かけたキャンプ場や大自然の中で行うこともある。聖書のお話しでは、1週間の始めには必ず、聖話が語られ、旧約聖書には、神様のお働きや神様を信じて生きた人々との物語が記されている。新約聖書においては、イエス様の話や、行ったこと、生き方が語られイエス様によって新しい希望や喜び、勇気を与えられた人々の姿が記されている。これらの聖話は、「キリスト教保育」のカリキュラムに則って行われることが多くある。毎日の礼拝となると、牧師や園長に代わり、担任が行うことが多くあり、新人の保育者にとっては大変難しい聖話となっている。園長や牧師の導きにより、子どもたちにわかりやすい聖書の物語からはじめられることが多い。イエスのたとえ話をすることにより、保育者もまたイエス様を身近に感じる時間となることとなる。

「ペンテコステ」は、クリスマス、イースターと並ぶ教会の三大行事の一つである。ペンテコステは、イエスが復活してから50日目、昇天してからは10日後の日曜日に弟子たちは神様から大きな力を受けた。この50日目あるいは50日間をペンテコステと言われている。子どもたちには、教会の基が誕生した日として、教会の誕生日として語られることもある。日本語では「精霊降臨日」として礼拝を行われている。子どもたちには、世　界中に教会があることを語り、キリスト教の宣教が始まった日として語られることが多いが、保育の中ではこの行事を行っているところは少ないと考えられる。

「幼児祝福式」は、日本の伝統行事の一つであるが、キリスト教の園でも、今まで成長させてくださった神様に感謝をささげ、感謝の気持ちを持つ時として、七五三の時期と同じ時の行うことが多くなっている。キリスト教の園で日本的な伝統を取り入れることを良しとしない園もあるが、神社に幸運を祈願すという方法ではなく、今までの成長を感謝する機会として母親、父親にも子どもはかけがいのないものとして守り育てていくことを強く意識できる機会でもある。

「収穫感謝祭」は、1620年にイギリスの宣教徒がメイフラワー号でオランダからアメリカ大陸に渡った際に、大陸での1年間は収穫もなく苦闘していたが、先住民の友を得て土地に適したトウモロコシの種をもらい育てて豊かな収穫物を得ることができたことに対しての感謝の礼拝をささげる人位置付けられている。幼稚園では、子どもたちがそれぞれ野菜や果物、お米など持ち寄り、礼拝をささげる。その後園によっては、持ち寄った食材で料理をし、感謝して頂いたり、地域の一人暮らしの方や老人センターなどにお見舞いにいくこともある。ねらいとしては、秋の実りに感謝する気持ちを育てることを中心に、分かち合う喜びや私達の生活はいろいろな人によって支えられていることを学ぶと同時に、米や野菜、果物、木の実に興味を抱くことに繋げながら感謝の気持ちを大切にし、クリスマスへと繋げていく行事の一つである。

「クリスマス」は、待降節とも呼ばれ、キリストの誕生を祝うキリスト教の三大行事の一つである。12月25日だけを祝うものではなく、25日の前の4回の日曜日を含み1週ごとにアドベントクランツに明かりをともしクリスマスまでの4週間を待ち望む期間でもある。4本揃った時がクリスマスとなる。

子どもたちは、神様が、その独り子のイエス様を私たちに下さったことに感謝し、喜び共に祝う。クリスマス礼拝では、降誕劇を行い、イエスキリストの誕生までを讃美歌や聖書の言葉を入れながら表していく。ページェントと呼ばれており、イエスが生まれた場所を知り、お祝いに来た羊飼いや博士などと共に喜びを表す。クリスマスは、受けるだけの喜びだけではなく、贈る喜びも体験することにより、クリスマスケーキを食べて、プレゼントをもらうだけのイベントから子どもたちは、イエス様の誕生を通して真のクリスマスの意味を知る。イエス様が私たちのために生まれてくださったその意味を覚えながらその日を迎えることとなる。

「イースター」は、別名復活祭、とも呼ばれている。イエスキリストが私たちの罪の贖いのために十字架にかかり、墓に葬られた三日後に復活して弟子たちの前に姿を現した。そのことを祝うキリスト教の最大の祝日である。春分の日の後、満月後の初めての日曜日と定められている。クリスマスと同等にイースターを迎えるまでの準備期間がある。レント（受難節）から始まって復活日を経て聖霊降臨祭（ペンテコステ）まで

続く。また、復活日の前１週間は受難週とし、この週の金曜日にイエス様が十字架にかかった夜に礼拝を行う教会が多くある。幼稚園では、よみがえりということで、復活を意味する命を卵を用いて礼拝を行う。園によっては、卵を教師が隠し、子どもたちが見つけて祝うこともある。イースター礼拝として牧師に聖書の話を短い時間ではあるが行って頂き、クリスマスと同じ特別な日として嬉しい日であることを伝えていく。卵を用いることは先に述べたが、食紅で色を付けたり、カラフルなセロファンで包んだりしてイースターエッグを教師が創ることが多い。卵という命から生まれて復活をあらわすことを子どもたちに話しながらともに祝う。また、新人教師も学びの時間となる。

Ⅴ．日本ならではの行事について

幼稚園の中で行われている数々の行事についてみていく中で、日本特有の行事についてどのように対応されているか調べていくこととする。

「子どもの日」

端午の節句と呼ばれ、男の子の節句となったが、近年では、男女限らず、成長を祝う祝日となっている。菖蒲やヨモギを軒先に刺し、ちまきや柏餅を頂く。かぶとや武者人形を飾って祝うことが多い。キリスト教の園では、聖書の言葉として「成長させてくださるのは神です」コリントの信徒への手紙第Ⅰ３章６節が挙げられることが多い。多くの園で、こいのぼりを作成したり、飾ったりする。経験する内容として５月人形の飾りを見る、かぶとや菖蒲、こいのぼりの意味を知ることであるが、やはり神様に守られ、両親や周りの人々の愛の中で育てられていることに気づき、感謝することを大切に保育を行っている。

「母の日・父の日・敬老の日」

これら３つの行事については、それぞれの日の意味を知る。母の愛を知り、感謝の心を持つ。父親の働きについて知り、感謝する。長年にわたり、家族や社会のために尽くしてきたお年寄りを敬愛し、長寿を祝う。母の日、父の日、敬老の日は礼拝をもって感謝する気持ちを表し、参観の意味を込めて幼稚園での子どもたちの様子を見ていただくことが多い。プレゼントを作って渡したり、歌などで楽しい雰囲気も大切する。それぞれに手紙を書いたり、メッセージカードを作ったりしながらその日を楽しみに待つ。聖書の言葉として、「あなたの父と母とを敬え」出エジプト記 20 章 12 節が挙げられることが多い。敬老の礼拝では、同居している家族が少ないこともあり、幼稚園での子どもの写真と子どもが描いた絵などをお便りで知らせることを行っている園もある。また、おじいさん、おばあさんを身近に感じることが少ない今日では、近隣のデイサービスの施設や老人ホームなどに訪問することもある。

「お月見」

本来は、収穫を祈る昔からの農耕儀礼のひとつであり、新米、栗、お団子などその年にできた初物を供えて月を祭る風習であるが、１年中でこの夜の月が最も澄んで美しいとされる。キリスト教の保育の現場では、初物を供えるということは行わないところが多いと思われる。しかし、月の世界、星空について知ることができるように配慮を行っている。お月様の昔話や歌などによりそれができると思われる。お団子を作り子どもたちといただくことを行っている保育現場はあると考えられる。

「七夕まつり」

旧暦の７月７日の夜に天の川の両岸で彦星様と織姫様が合うことができるということで子どもたちには視聴覚教材を用いて行うことがある。七夕祭りとして、正しくは伝説に基づいて星を祭る行事ではあるが、多くの保育現場においては、星に願い事をする五色の短冊に「○○ができるようになりたい」などと個人の願いや「みんなが病気をせず楽しく暮らせますように」などを書き、折り紙などで作った天の川や織姫、彦星、夏の果物や野菜などを描き笹飾りを作っていく。風習として星に願いを託したり、祈ったりするが、キリスト教の園ではこれらの取り上げ方に十分気を付けて行う。日本の伝承的な行事の一つとしてあまり気付かなかった星の世界に興味を持たせることのねらいの一つとして行うことが考えられる。

「七五三」

本来は、11 月 15 日に子どもの成長の節目として男児５歳、女児３歳、７歳に達した子どもに晴着を着せて神社に幸運を祈願する振動の行事である。教会やキリスト教の保育施設においては、今まで成長させてく

ださった神様に感謝をささげ礼拝を行う。聖書の個所は、「幼子はたくましく育ち、知恵に道、神の恵みに包まれた」ルカによる福音書２章40節が御言葉として礼拝で話されることが多くある。近年では、この時期に幼児祝福式が行われ、成長を喜び、神様に感謝をすることをねらいとして行われている。

「節分」

神社などで悪魔を払い、春を迎える意味で行われる行事の一つである。キリスト教の園においては、「悪魔」という言葉は使わず、絵本などに出てくる「鬼」を追い払うという意味で豆まきを行うところがある。絵本などから、鬼の気持ちや人間の弱さなどを知るきっかけとなると思われる。立春を迎え春になるという事にも目を向け、寒い冬から暖かい春に向かっていることにも気づくきっかけとなるように配慮を行いながら行う。また、子どもたちの意欲を盛り上げるために様々な材料を準備し、鬼のお面制作を行う。鬼遊びを行い、年の数に１つ足した数の豆を頂く。「鬼」イコール「悪」ということは避け、様々な鬼の絵本に触れる時間となる。

「ひなまつり」

桃の節句と呼ばれている。キリスト教の園でもひな人形を飾り、ひな祭り会を行うところがある。しかし、段飾りが階級を意味するので飾らない園もある。元々は、悪疫や身に降りかかる災害を人形に託して川に流したものという言い伝えがある。この時期のひな祭り会において、各クラスの発表会を行うところも増えてきた。各々が作ったひな人形を飾り、成長を願う行事となる等に配慮された内容になっているところもある。聖書の御言葉は、「人間の心は自分の道を計画する。主が一歩一歩備えてくださる。」箴言16章９節が語られることがある。

Ⅵ．まとめ

新人保育者・未信者の保育者が行う「キリスト教の行事」は、聖書に基づいて、事実を話すことがポイントである。キリスト教の教えに沿って保育に繋げていくことは大変難しいと思われる。牧師や園長などが行事の前に聖書に忠実に行うことに配慮を行うことの大切さを説いていくことも重要になってくる。昨今の保育事情も変化し、保護者のニーズも高まり、商業施設も本来の意味を表すことなく、ディスプレーされている。様々な情報に惑わされずに一つひとつ、日本の伝統行事とキリスト教の保育内容をすり合わせながら、中心にはいつも神様がいるところから始めることを願う。クリスマスなどは、厳かな雰囲気を大切に行いたい行事の一つである。

静かに語ることを心がけることから始めると、子どもの心にじんわり、じんわり染み込んでいくであろう。しつけ、教訓ではなく、あくまでも、聖書の御言葉を伝えることに集中することを心掛けるとよいであろう。それらは、主任、園長、牧師のサポートがあって初めて、子どもの心に残る「キリスト教の行事」となるであろう。また、保育者が語ることにより、神さまの存在、大いなるものが伝わっていくのである。

また、信仰を持って保育にあたっているものは、未信者にとって、目の前の学びの姿となる。保育者が神によって生かされ、イエスに信頼しつつ歩もうとする喜びに満ちた姿勢を持つことが大切であろう。穏やかな応答、一人ひとりの子どもに温かいまなざしを持って接し、さわやかな表情を持って子ども達を包みこむ。神さまが私たちを愛してくださったように、私たちも愛し合い、答えることが出来る保育者、そんな保育者を目指して行きたい。

引用文献

１）2021年キリスト教保育４月号 p32
　３歳児　月主題一覧表
２）2021年キリスト教保育４月号 p33
　４・５歳児　月主題一覧表
３）後宮 敬爾 2021年キリスト教育４月号 p20
４）後宮 敬爾 2021年キリスト教保育４月号 p21

参考文献

・キリスト教保育の現場における聖書のあり方－子どもの心に残る神さまのお話し－西南女学院大学大学紀要 VOL.18.　松尾裕美 2014年
・キリスト教育 2021年
・キリスト教保育指針　キリスト教保育連盟 2012年

・子どもと行事　キリスト教保育連盟 1994 年
・新クリスマスハンドブック　いのちのことば社 1988 年
・クリスマスの招き　燦葉出版　1983 年
・新クリスマスハンドブック　いのちのことば社 1988 年
・子どもに伝えたい年中行事・記念日　萌文書林 1988 年
・新約聖書
・旧約聖書